

二六五一番

難波人 葦火焚く屋の すしてあれど 己が妻こ
そ 常めづらしき

二六五二番

妹が髪 上げ竹葉野の 放れ駒 荒びにけらし
逢はなく思へば

二六五三番

馬の音の とどともすれば 松陰に 出でてそ見
つる けだし君かと

二六五四番

君に恋ひ 寝ねぬ朝明に 誰が乗れる 馬の足音
そ 我に聞かする